



message for 2020

ソフトボール競技は
東京 2020 の追加種目に

「覚悟」と「責任」を両輪に

宇津木 妙子 氏

公益財団法人日本ソフトボール協会副会長
シドニー／アテネオリンピック ソフトボール女子日本代表監督

〔うづぎ たえこ〕

1986 年から日立高崎ソフトボール部の監督を務め、当時日本リーグ 3 部のチームを常勝軍団へと育て上げる。1997 年、日本代表監督に就任し、シドニーオリンピックで銀メダル、アテネオリンピックで銅メダルを獲得。現在は、ビックカメラ女子ソフトボール高崎シニアアドバイザー、東京国際大学女子ソフトボール部総監督として、後進の指導にあたる。1953 年埼玉県生まれ。

—— 宇津木さんのオリンピックの思い出についてまずうかがいます。監督として初めて臨まれたのは 2000 年シドニー大会でした。

代表監督のオファーを受けたのは、アトランタ大会の翌 1997 年です。アトランタ大会にコーチとして参加していた私は、船頭が多すぎるためにチームとしての一体感が欠けていると感じていました。そこで「もし監督を引き受けるなら全権を任せて欲しい。その代わり、すべての責任は私がとります」と協会にリクエストしたうえで、チームづくりにかかりました。

選ばれた選手たちへの第一声は、「練習、生活、すべて私の言うことを聞いてもらう。それが嫌な選手は帰ってくれ」。それから、もう人間教育でしたね。挨拶に始まり時間厳守、整理整頓……。日常生活での、ほんのわずかな「これくらいなら」という油断は、そのままグラウンドに表れてしまうので、厳しく指導しました。

—— 「マシンガンノック」をはじめとする宇津木監督の厳しい練習は、広く知られています。指導する際に心がけられたことは？



プレー面では、徹底的に基本を大事にしました。基本ができていなければファインプレーも生まれませんから。自己中心的なプレー、行動は絶対に許さなかった。

ただし、叱る時にもいろいろな工夫はしていました。例えば、選手本人ではなくマネージャーを叱ったほうが「自分たちのために叱られている」と、選手には効果的な場合もありましたね。避雷針役のマネージャーは大変だったでしょうが（笑）。またチームのリーダー的な存在である（宇津木）麗華や安藤（美佐子）には、前もって「今日は皆の前で叱るからな」と伝えた上で叱ってみせ、チームの引き締めを図っていました。その辺りの駆け引きは、我ながら上手にできたと思います。

特に心がけていたのは、選手とのコミュニケーションです。ウォーミングアップで少し様子がおかしい選手がいたら声をかけ、練習後にはお風呂でお互いの身の上話をしたり。愛情をもって自分をさらけ出すことで、選手も私を信頼し、最後までついてきてくれたのではないかと思います。

無念の「銀」、後悔の「銅」

—— 結果、シドニーでは銀メダルを獲得されました。

シドニーのチームをひと言で表現すると「大人のチーム」。選手それぞれの個性がとても際立つ

ていて、練習やふだんの生活では衝突ばかり。それでもいざ試合になると一つにまとまって力を発揮する、ある種特異なチームでした。

だからこそ勝たせてやりたかった、金メダルを取らせてあげたかった。決勝のアメリカ戦、先制直後にピッチャーを交代するつもりでしたが、相手監督の悠然とした姿を見た瞬間、私は交代を躊躇してしまいました。結局、続投させた選手が打たれ、タイブレークの末に敗戦。明らかに監督の失敗でした。

ただ、そこで救われたのは、最後にエラーしたレフトの選手に対し、他の選手全員が「あなたのせいじゃない、皆のエラーだ」と言ってくれたこと。本当にいいチームになってくれたと感じました。

——そして次のアテネ大会で銅メダルを獲得。大会に臨む上で、シドニーと違う思いはありましたか。

アテネでは、いろいろな面で準備不足でした。例えば、ルール改正でボールがひと回り大きくなったのに、国内リーグへ導入されず、各国に後れをとってしまった。また、当時流行したSARS(重症急性呼吸器症候群)の影響で海外遠征ができないこともありました。何度も現地を下見し、事前合宿を重ね、万全の態勢を整えたシドニーとは比べ物になりません。

私自身、アテネの監督を引き受けるかどうか迷いがありましたし、全権委任に異議を唱える協会の声も聞こえてきました。加えて、シドニーのメンバーが数多く残っていたので「あの子たちだったらやってくれる」という過信、勘違いがあったのかもしれませんが。振り返ってみると、シドニーの時のような「覚悟」が、私自身に無かったのだと思います。

監督の覚悟は、選手たちにも伝わるもの。シドニーでは寝込んだりケガをする選手は1人もいませんでした。風邪をひけばすぐにメンバー外になるので、全員が緊張感を持っていたからです。それがアテネでは、大会前の合宿からパスポートを



北京オリンピック決勝の対アメリカ戦。優勝を決めた選手たちの視線の先には、実況席で涙に濡れる宇津木“監督”の姿が

写真：アフロススポーツ

忘れる選手や、ケガをする選手がいたり。選手村へ入ってからでもエアコンの設定が低すぎて膀胱炎を起こす選手が続出したり。メダルは取ったものの、後悔しか残らない大会でした。

エース・上野由岐子に託した想い

——金メダルを獲得した北京大会では、解説席からチームの活躍をご覧になっていました。

アテネ大会終了後の選手村で、上野(由岐子)と山田(恵里)には「最後になる北京オリンピックで日本ソフトボールを1位にしてくれ」と頼みました。その時点でオリンピック競技からの除外は決まっていた、おそらく私が監督を続けることもないと感じていたからです。

それからの4年間は、所属のルネサス高崎で、上野を徹底的に鍛えました。アメリカ遠征へ連れていき、シュートを覚えさせ、また毎日のように「勘違いするな」「自分を信じろ」「周りからも信頼されるようになれ」と声をかけ続けました。上野も私の想いに応え、もうこれ以上は、というくらいに練習に励んでくれました。何度か貧血で倒れたことさえあったほどです。

だからこそ、優勝を決めた上野たちが、解説席にいる私に対して呼びかけてくれた時は、涙が止まりませんでした。

競技の明日を左右する東京2020

——さて、この8月3日、ソフトボールを含む5競技18種目が東京2020の追加種目に採択

されました。

決まった瞬間、すごく嬉しかったのはもちろんですが、同時に「絶対に勝たなきゃいけない」という使命、宿命のようなものを感じ、思わず身が引き締まりました。もちろん、日本が勝てばそれでいい、というわけではありません。世界各国への普及・強化や観る競技としての面白さの発信など、やるべきことは山ほどあります。2024年、2028年もソフトボール種目が続くかどうかは、東京での成功次第。責任は重大です。

—— 宇津木さんご自身、オリンピック種目への復活に向けさまざまな活動に取り組んで来られました。

オリンピックに出なくてもソフトボールは続けし、オリンピックだけがすべてではないことは理解しています。でも、今まさに繰り広げられているリオ大会を見ていると、やっぱり憧れますね。かつては私たちも同じ舞台に立っていたわけですから。

ソフトボールが初めてオリンピック種目となった1996年のアトランタ大会。私はコーチとして夢の舞台に参加し、開会式では行進しながら涙が自然に出てきたことを覚えています。幼い子どもたちにも「オリンピックに出るんだ!」という目標を与えたい。NPOを立ち上げ、普及活動に走り回ったのは、その一心でした。

自分との戦いを根気よく続ける

—— 東京2020を目指す指導者へのアドバイスをひと言。

これまでの経験を通じて、私が最も伝えたいのは、オリンピックのリーダーとなる人には「覚悟」を持って欲しいということ。もちろん皆さん理解しておられるとは思いますが。

「覚悟」は監督だけでなく、協会やスタッフも含めた全体が持たなければなりません。シドニーの時は「ソフトボールをメジャーに」という思いで、全員が一つになりました。東京でも、最高のスタッフで、最強のチームをつくり、ソフトボー

ル競技の素晴らしさを世界中に伝えて欲しいですね。これは他の競技にも同じことが言えると思います。

また女子の、特にチームスポーツでは、もっと女性指導者を起用してもいいのではないのでしょうか。女子選手の場合、練習の中でどうしても余力を残してしまう傾向があります。そこは同性だから分かる部分もあって、ギリギリの線まで選手を追い込めるので。

ただし、女性ばかりの集団になると、メリハリのない部分が出てきてしまうので、異性の目も必要になります。例えば、男性トレーナーが1人いるだけで、朝起きて食事集まる時、多少は身ぎれいにするようになるはず。女性同士の慣れ合いにならないよう、気を配るといいでしょう。

—— 2020年を志す選手の皆さんに伝えたいことは？

選ばれた人間としての「自覚」と「責任」を持つこと、でしょうか。周りはいろいろな見方をするけれども、最後は自分。「人に見られているから」ではなく、自分がなすべきことを考え、行動して欲しいですね。

リオ大会の橋本聖子団長は「人間力なくして競技力向上なし」というスローガンを掲げています。また柔道男子の井上康生監督は「挨拶ができない者は代表を辞めろ」と指導しているそうです。私もまったく同感。日々の挨拶や時間厳守、整理整頓といった基本的なことができない人間は、競技者としても一流になれません。シンプルなことを、4年間根気よく続けるのは自分自身との戦いになりますが、妥協せずに取り組んで欲しいと思います。

その選手の力を引き出す監督もまた、選手以上の「自覚」と「責任」を持って臨んで欲しいですね。■



リーダーの「覚悟」がチーム、選手の力を引き上げる
写真：アフロスポーツ